

## Giri Giri BOYS K7 Expedition 2017 報告

メンバー構成：

隊長：横山勝丘 38歳 以下、長門敬明 38歳、増本亮 38歳、佐藤裕介 37歳 計4名

もともとは横山・長門・増本の三人で向かうはずだったカラコルム・チャラクサ氷河の遠征。2014年にこの三人でバダルピークからのK7 ウェスト縦走をトライしたが失敗に終わっていて、今回は再びこの三人で同じようなスタイルのクライミングを計画していた。そこに佐藤が同行を申し出てきた。同時に、縦走よりもビッグウォールフリークライミングを熱望していた増本が佐藤と意気投合し、縦走隊とフリー隊の二チームに分かれてクライミングを行なうこととなった。横山・長門チームは、K7 主峰南西稜もしくはK7 西峰南西稜のアルパインスタイル登攀が目標。増本・佐藤チームは、バダルピークの新ルートのカプセルスタイルのオールフリーで拓くのが目標。

日山協の奨励金申請には三人で計画書を提出していたが、どちらの隊のクライミングも成功すれば価値のあるものとなる可能性を秘めていること、日本出国から帰国までBC滞在も含めて行動がほぼ同じことを考慮し、給付された20万円は四人で分配することに決めた。

4月からの三か月間は、瑞牆や日本アルプスでのトレーニングをそれぞれのチームで行なった。6月下旬からは富士山に滞在し、高所順応もうまくいったと思う。

7/10 出国。と思いきや、フライトキャンセル。成田泊。

7/11 出国。ラホールまで。

7/12～17 イスラマバード、ならびにスカルドゥにて準備。フーシェまでは車で移動。

7/18・19 キャラバン。フーシェ～サイチョー～BC。ポーター29名。

7/20・21 偵察、順応の準備、ボルダリング。

7/22～25 高所順応。横山・長門はBCより西に位置するドリフィカ(6400m)、増本・佐藤はBCのすぐ北に位置するソルピーク(5800m)を目指す。ラッセル、新たな降雪、雪崩の危険等により、それぞれ山頂には立たずに下山。

7/26～28 ボルダリング、偵察、準備等。増本・佐藤はベアトリス東壁に目標を変更。

7/29～31 横山・長門は再度順応。結局、K7 主峰を目指せるだけの十分な順応はできず、目標をK7Westに変更した。増本・佐藤は29日に壁の基部までの荷揚げを行なう。

☆Beatrice 東壁 The Excellent Adventure 第2登、フリー初登 600m 5.13a

2017年8月1~9日 増本亮・佐藤裕介

ベアトリス(5800m)東壁には、現在三本のルートが拓かれており、The Excellent Adventure (750m, ED+ A3+:初登時のグレーディング) は、1997年イギリス3人パーティーによって初登された、東壁中央を走るクラックを辿るライン。もともとは新ルートに登るつもりでこのラインに取り付いたが、1ピッチ登ったところでアンカーを発見。結局そのまま登ることとなり、最終的にはほぼ同ルートのフリー化となった。600m以上に渡ってクラックが続く素晴らしいルートで、ルート上にあるボルトは終了点のアンカーのみ。ルートは主に3つのパートに分けられ、逆層ハング越えから雪田までの下部120m。特に傾斜の強い5~11ピッチ目の中間部はフリー化の際も核心となり、5.12台5ピッチ、核心ピッチには5.13aを付けた。上部6ピッチは傾斜が緩まり概ね快適なハンドクラックが稜線まで続いている。更にリッジ上のクライミング2ピッチと雪稜を経てピークに達する。ここまで充実したピッチが連続するヒマラヤビックウォールは、非常に珍しいだろう。

取り付きまでの荷揚げをして2日間のレスト後、BCを出発。9日間の登攀。壁中6泊。4本のロープを持参しカプセルスタイルでの登攀となった。

<ピッチ概要>

1P目 A1+後 5.11b 40m 濡れた逆層ハングからスラブをトラバース。

2P目 5.10a 60m 左に水平トラバース後、少々脆いフェースを右上。

3P目 5.10b 55m 濡れたスラブ部分が悪い。

4P目 C1後 5.11a 40m 雪田テラスからコーナー。小ハングから先は泥が詰まっている。

5P目 C2後 5.12a 20m 以後7P目までは要掃除。被ったコーナーをレイバックとステミングで。

6P目 C2後 5.12b 30m 前半はレイバック、後半は甘いジャミングの連続でコーナーをいく。

7P目 C2後 5.12a 50m レイバックとフェースムーブで変化に富んだ長いクラックピッチ。

8P目 5.10d 15m フェースを回り込み濡れたコーナーに行く。

9P目 5.12b 30m 傾斜が一気に増す。ボルダーチックな序盤から苦しいレイバック。最後のマントルも厳しい。

10P目 C2後 5.13a 30m 傾斜110度。クラックは途切れ途切れでフェースムーブ中心の核心。

11P目 5.12c 50m 被ったコーナークラックが50m続く。完登時は濡れていて非常に奮闘した。

12P目 5.11a 50m 中間部までは濡れていて気が抜けないコーナー。

13P目 5.11c 60m 完全に乾いて、ジャムのきく楽しいクラック。

14P目 5.9 60m 快適なクライミングがつづく。

15P目 5.10a 50m 快適なクライミングがつづく。

16P目 5.10a 30m 快適なクライミングで雪田のあるテラスへ。

17P目 5.9 55m(リッジ到達、壁終了) 傾斜はあるが容易なクライミングで稜線へ。

18P目 5.9 20m 不安定な氷雪を避けながらクライミング。スラブが少々恐ろしい。

19P目 5.10c 45m 被った岩峰を避け、不安定な側壁をトラバースする。

20P目 雪稜 70m (山頂)。

☆K7 West 南西稜初縦走「Sun Patch Spur」 ED+/ 2300m+/ 5.11c, A2, 70°

2017年8月5～10日 横山勝丘・長門敬明

3年前に敗退したバダルピークから K7West までの初縦走をリベンジ。ラインは非常に複雑かつ長大で、実際にどこを登攀したのかの説明が難しいため、単純に K7 West 南西稜初縦走と呼んでいるが、ここには新ルートからのビッグウォールクライミングと氷雪壁やリッジの登攀、さらには未知の壁の下降も含まれている(2枚のルート図を参照)。

8月2日に下部岩壁のフィックス工作。本来なら取付からワンプッシュのアルパインスタイルでトライしたいところだったが、下部岩壁の傾斜の強さから時間がかかることが予想されたため、BCにあったロープ8本をかき集めてフィックス工作をすることにした。ラインは、前回登った右端の岩稜の一本左。取付と1ピッチ登った場所に古いスリングを見つけたが、それ以降は人工物を何ひとつ見ることはなかった。9ピッチのガリー～チムニー～クラックの登攀(最高5.11c)で小レッジまで。雨の中びしょ濡れになりながら、同日中にBCまで戻る。

二日間のレスト後、8月5日夜明け前にゴーアップ。フィックスをたどり、トップに着いてから不必要な装備やロープをホールバッグに入れて投げ落とす(登攀翌日、回収を行なった)。

ここから登攀開始。岩セクションは全ピッチ長門がリード。

初日は7ピッチ(A1含む)登り、岩稜上でビバーク。雪がないため水が作れず、またテントを張れるだけのスペースもなく、初日から苦しいビバーク。

二日目は同時登攀600mを含む8ピッチの登攀(5.11c、A2)で前回の2ビバーク目のテラスまで。夜10時過ぎまで頑張った。ラインは非常に複雑で、何度も行ったり来たりを強いられた。また、風化した岩の人工登攀や重荷を背負っての同時登攀など、体力も技術も高いものを要求され、ルート全体を通しての核心となった。

三日目は前回と同じラインをたどるので気が楽。A1クラックを含む4ピッチの岩登りも首尾よく越え、氷雪壁へ。ここから先は、すべて横山がリードとなる。4回の懸垂下降、ならびに5ピッチの氷雪壁の同時登攀でバダルピーク山頂へ。雪を削ってテントを張りビバーク。

四日目はいよいよ前回敗退したポイントを越え、新しい領域に入る。2回の懸垂下降を交え、複雑なリッジをひたすら同時登攀で進む。前半は主に稜線の右側、後半は大きく左に巻いて、巨大なセラックの下をトラバース。最後はセラックの間を縫って頂上プラトーに立つ。午後4時、テント設営。まだ時間があったので、山頂を目指すつもりで出発したが、雪が柔らかく、腰までのラッセルを強いられたためにテントに戻る。翌日、夜明け前から動き始めるつもりで就寝。その夜から降雪が激しくなる。

五日目。降雪は明け方まで続いたので、起床を遅らせる。夜が明けて、不安とともにテントの外に出ると、雪壁にもあまり雪は付着しておらず、安心して出発。低温、ラッセル、それに視界不良により時間がかかったが、午前9時過ぎ、無事に登頂。すぐに下山を開始し、テントを撤収後に北西壁側に下降を開始。途中から吹雪が始まったが、なおも下降を続ける。20回以上の懸垂下降の末、日暮れ直前に氷河に降り立つ。

六日目。反対側の尾根に向かってガリーを登り返し、尾根からは岩の斜面をBCに向けて一直線。午前中にはBCに戻る。

8/11 BC 滞在最終日。片付けとホールバッグ回収。その後、ボルダリング。

8/12・13 バックキャラバン。BC～サイチョー～フーシェ。その後スカルドゥまで車で戻る。

8/14 フライトにてイスラマバードまで。と思いきや、フライトキャンセルにより急遽車をチャーターし、陸路でイスラマバードまで向かう。横山は車酔いにより一日中グッタリ。本遠征中、最も辛い時間であった。

8/15～17 イスラマバードにてウダウダ。ひたすら漫画を読み漁る。

8/18 帰国。成田空港で日本食とビールで乾杯し、40 日間の遠征を終える。

いつもの遠征に比べると、トータルの現地滞在時間は短く、また街での準備にも時間がかかったため、BC 滞在はたったの 3 週間であった。「まともなトライはできるのだろうか？」という不安に追い打ちをかけるように天候も安定せず、順応活動にも支障をきたすほどの降雪があったりして、ネガティブな要素が増えていった。

それでも、結果的には 2 チームともに満足のいくクライミングができて、本当にうれしい限りだ。どちらも、一番の目標に掲げていたクライミングはできずに終わったが、それを凌駕するくらい内容の濃いクライミングで、これまでの登山経験の中でも一、二を争うほどの難易度とクオリティの高さだったと自負している。これまでに培った経験がやっと花開いた結果と言えるだろう。

ここ数年は、ヨセミテやパタゴニアで岩登りを中心とした活動ばかりしていたが、そういう経験がなければ今回の結果はなかったと思うし(特にベアトリス)、また、かつてアラスカやアンデス、ヒマラヤなどでひたすら氷雪壁、ミックス壁を登り込んだ経験がなければ、上部で敗退していただろうことも容易に想像がつく(特に K7West)。またそれら以前に、国内における登攀では海外を意識したトレーニングを夏冬通じて行なっていて、そういうすべての経験の積み重ねが今回の結果だと言えるだろう。今回のメンバーは全員が 1979 年生まれの 38 歳(佐藤は 12 月に 38 歳になる)。30 代の集大成と言えるだけの登攀ができたと思う。

それぞれが理想の登攀を思い描き、それをヒマラヤの大きな山の中で具現化する。こんなに贅沢で充実感のある時間を持つことができたのは幸せである。サポートをしてくださった各スポンサーならびに山仲間、家族、そして日本山岳協会に感謝したい。

<写真キャプション>

1：登攀終了後、ABC より見上げたベアトリス東壁。中央の顕著なクラックが TEA。

2：ベアトリス東壁、三日目のビバーク地。

3：ベアトリス東壁 10 ピッチ目。5.13a の核心。

4：ベアトリス山頂直下の岩稜。

5：Sun Patch Spur 全体図。

6：Sun Patch Spur 横からの図。

7：Sun Patch Spur 下部岩壁の登攀。

8：Sun Patch Spur 下部岩壁上部のクラック(5.10b)。

9：Sun Patch Spur 下部岩壁の最上部はボロボロの岩。

10：バダルピークから K7West までのリッジは複雑。

11：リッジ最上部は左のセラック下から巻く。

12：K7 West 山頂にて。左：長門、右：横山

写真1





写真 2





写真 3



写真 4





写真 5



写真 6





写真 7



写真 8





写真 9



写真 10



写真 11



写真 12

